

- 2 ..... 朝鮮学校「高校無償化」裁判判決を受けて
- 3 ..... スノーデン文書が照らし出す共謀罪時代(下)
- 4 ..... アジア・太平洋フリースクール大会(APDEC)開催
- 5 ..... ペロ亭の岩国さん 東京で70歳の個展
- 6 ..... DVD「ライブ・ゴーズ・オン 彼女たちの選択」

# ふえみん

## 高校教員として人権教育に取り組む 土肥いつきさん Dohi Tsuki

# すべての人権を「公式な人権」に

「アンチ・ファシスト」と描かれたTシャツで現れた、土肥いつきさん。京都府立高校の教員となつて33年。数学を教え、放送部の顧問を務める。人権教育にも長く取り組んできた。



クリスチャンの家庭に「長男」として生まれる。大学で電子工学を学び、高校教員という道に進んだ。だが、「最初は差別問題と正面から向き合うことから逃げてたんですよ」。日本社会において、若く「健康」な男性である自分は特権的な立場にいるという自覚はあった。マイノリティと向き合えば、自分の立場の差別性を直視せざるを得ない。「そんなしんどいこと、したくないわん」

一方で、尊敬する教会の先輩に「学校には在日の子どもが必ずおる。関わらなあかんぞ」と言われた言葉は心に残っていた。しかし「関わる」という意味からしてわからない。在日や被差別部落という背景をもつ生徒に声をかけるのに3年以上かかった。その間に学び、多くの知識は得る。「だから(通名でない)、本名宣言」や「部落民宣言」を教条的に「やらなあかん、やらせなあかん」と、子どもをバックアップするようできて、押しつけていたと思えます



教員生活は充実していたが、家に帰ると心の奥にしまった「小さな箱」が開く。男性の体で

あることへの違和感と、女性の体になりたいという思い。いつきさんには、子どもの頃から誰にも言えずに抱えてきた「苦しさ」があった。ある時、ゲイの同僚に借りた本によって「苦しさ」に名付けることができた。「トランスジェンダー」

「説明する言葉を獲得できたのは、大きな出来事でした。36歳の時である。その後、あるゲイの人から「君はトランスジェンダーであることを実践しているのか？」と言われたのを機に、男性から女性へとトランスすることを決めた。しかし当時は授業を持たない、人権教育の加配教員だった。「これがしんどかった。直接つながりのない子どもたちから、総攻撃を受けました」。聞かせるように「オ



カマ」と嘲笑され、冷ややかな目を向けられる。休み時間は怖くて廊下が歩けなかった。

「自分なりに落ち着いたなど思うまで約10年かかりましたね」と振り返る。ホルモン注射や脱毛によって、徐々に女性として違和感のない体となった。新しく入学してきた生徒たちは、いつきさんのトランスを知らない。露骨な攻撃に怯えることはなくなった。

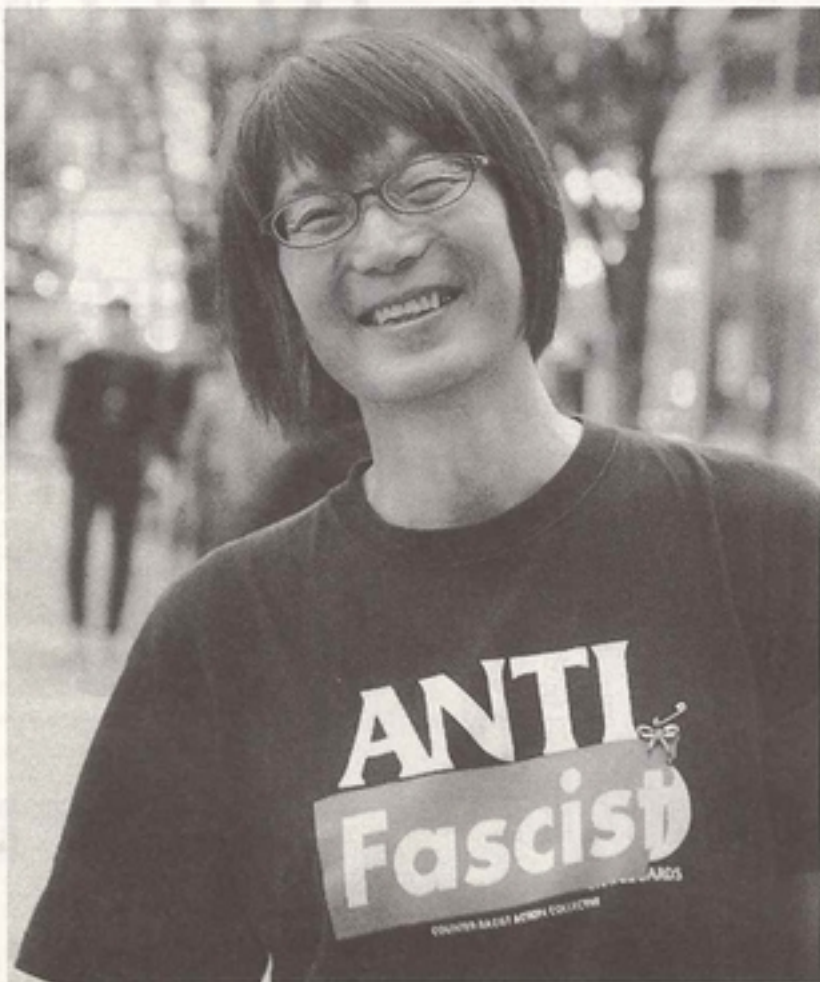
学校には「学力保障」と「アイデンティティ保障」の2つの役割があると言おう。「学力保障はみんな、好きなんです。教えるのが好きだから(笑)。でもアイデンティティ保障はいやがる。生徒の話をじっくり聞いて、生徒から教わらないといけないから。教員って、生徒から教わるのは嫌いという人が多い。でもこの2つが両立してこそ学校なんです」

ような関わりはしない。本名宣言も「言いたかったら言ったらいい」というスタンスを通す。「ただ、きつとその子は言いたいたろうなと思ってるんです。だったら言おうと思える関係性をつくれる環境を用意するのが私の役割かな。だからいろんなところや人につなぐ。感じるものがあれば、あとはその子が関係性をつくっていくから」

長い間、性的マイノリティは人権問題として認識されなかった。「在日や被差別部落の問題が公式な人権問題だとすれば、性的マイノリティは非公式」。それがここ数年で一気に「公式な人権問題」となった。しかし「特にトランスジェンダーは、病気が、障害」として「理解」されています。私は「脱病理化」を進めたい。そしてトランスの陰に隠れている同性愛の問題を顕在化させたい。かつて自分は、公式な問題である在日や部落問題がねたましかった。同性愛の子どもたちには絶対にそんな思いをさせたくないんです。

いつきさんは「絶対にいや」と力をこめて繰り返した。

聞き手…社納葉子  
撮影…井上陽子



「トランスジェンダー生徒交流会」や Queer をもじった「玖伊屋 (くいや)」 「在日外国人生徒交流会」など、当事者の子どもたちが安心できる居場所づくりにも力を入れる。「私が一番教わってるかも (笑)」

生徒との関わり方や数学の教え方、自分の内面や外見も、紆余曲折を経ながら変化してきた。しかし一貫していたのは「生徒や親とのタベリ」を大事にしてきたことだ。音楽や恋愛、昔のやんちゃ話…一見、他愛のない話から本音や抱え込んでいるしんどさがこぼれる。同時にたくましさや生きる力も。誰の人生も通り一遍ではないことや、人はそれぞれに力をもっていることを心に刻み込むように学んできた。

今はもう、生徒に押しつける

**profile**

どひ いつき  
1962年、京都府生まれ。京都市でパートナー、2人の子どもと暮らす。全国在日外国人教育研究会次長、セクシュアルマイノリティ教職員ネットワーク副代表。著書『「ありのままのわたしを生きる」ために』、共著『にし色の本棚』、編著『セクシュアルマイノリティ第3版』など。